

## 10 設計演習特論 B

開講年次：博士課程前期課程 1 年生第 2 クオーター

[担当教員]

遠藤秀平（教授）末包伸吾（教授）楢橋修（准教授）

### 課題：A CITY OF NEW NORMAL: with コロナ /after コロナの都市

#### ■課題趣旨

COVID-19( 新型コロナウィルス感染症 ) のパンデミックによって、私たちの世界はかつてないほどの変化の時代を迎えることになった。日本では 4 月～5 月に発令された緊急事態宣言が解除され、第一波の沈静化を迎えていたが、ワクチン不在のまま経済活動と都市生活を再開しはじめている。世界中でも、これから都市生活の変化に関して「新しい行動様式 (New Normal)」が合言葉となって、都市空間における生活様式を抜本的に変革していくことが求められている。

テレワークや外出の自粛、都市経済活動の制限などを経験し、誰もが新しい状況下での生活に直面し、体験したことで、with コロナ、after コロナの生活は、学生、社会人、こども、高齢者全ての人にとって、新たに取り組むべき共通の課題となつたといえる。

例えば日本では with コロナ期間の経済再生に資するべく国交省が緊急措置として「コロナ道路占用許可」を発表した。新型コロナウィルス感染症の影響を受ける飲食店等によるテイクアウトやテラス営業のための路上利用について、道路占用の許可基準が緩和され無償で路上営業ができるようになるものである。（2020 年 11 月 30 日まで）はからずも都市の風景が大きく変わる機会に立ち会うことになったわけである。

居住、仕事、教育、生活において、New Normal という新しい条件が課せられた現在、私たちはいかなる都市の未来を構想できるであろうか。新しい都市のイメージに向けてチャレンジしてもらいたい。

#### ■設計

- ・3名～5名程度のグループを組んで取り組むこと。
- ・大阪市内の都心部において具体的な敷地、区域を設定して計画すること。
- ・具体的な建築デザイン、都市デザインとして提案を作成すること。
- ・with コロナ /after コロナの時代において、都市災害（南海トラフ地震等）に対する防災機能も考慮に入れること。

#### ■進め方

グループを組み組織的にプロジェクトのリサーチ、計画のビジョンやコンセプト、マスターPLAN、建築空間の設計を行なう。  
すべてのエスキス、発表会はリモートにて開催する。

#### ■スケジュール

7/9 (木)	エスキス
7/23 (木)	エスキス
7/31 (金)	中間発表
8/7 (木)	最終講評会

#### ■チーム編成

チーム A	上山貴之 黒木孝司 吉川文乃 小池晃弘 田中駿介
チーム B	向上沙希 中上和哉 TINNU Panchanok 北村祐輝 佐田桜
チーム C	藤原比呂 谷口浩都 楠橋請ノ助 大石祥子 胡徳贊
チーム D	檀野航 高橋和志 鈴木滉一 藤井郷 曹陽

#### ■「A CITY of NEW NORMAL 展」

会場：日本橋の家

日時：2020 年 11 月 21 日（土）～11 月 29 日（日）

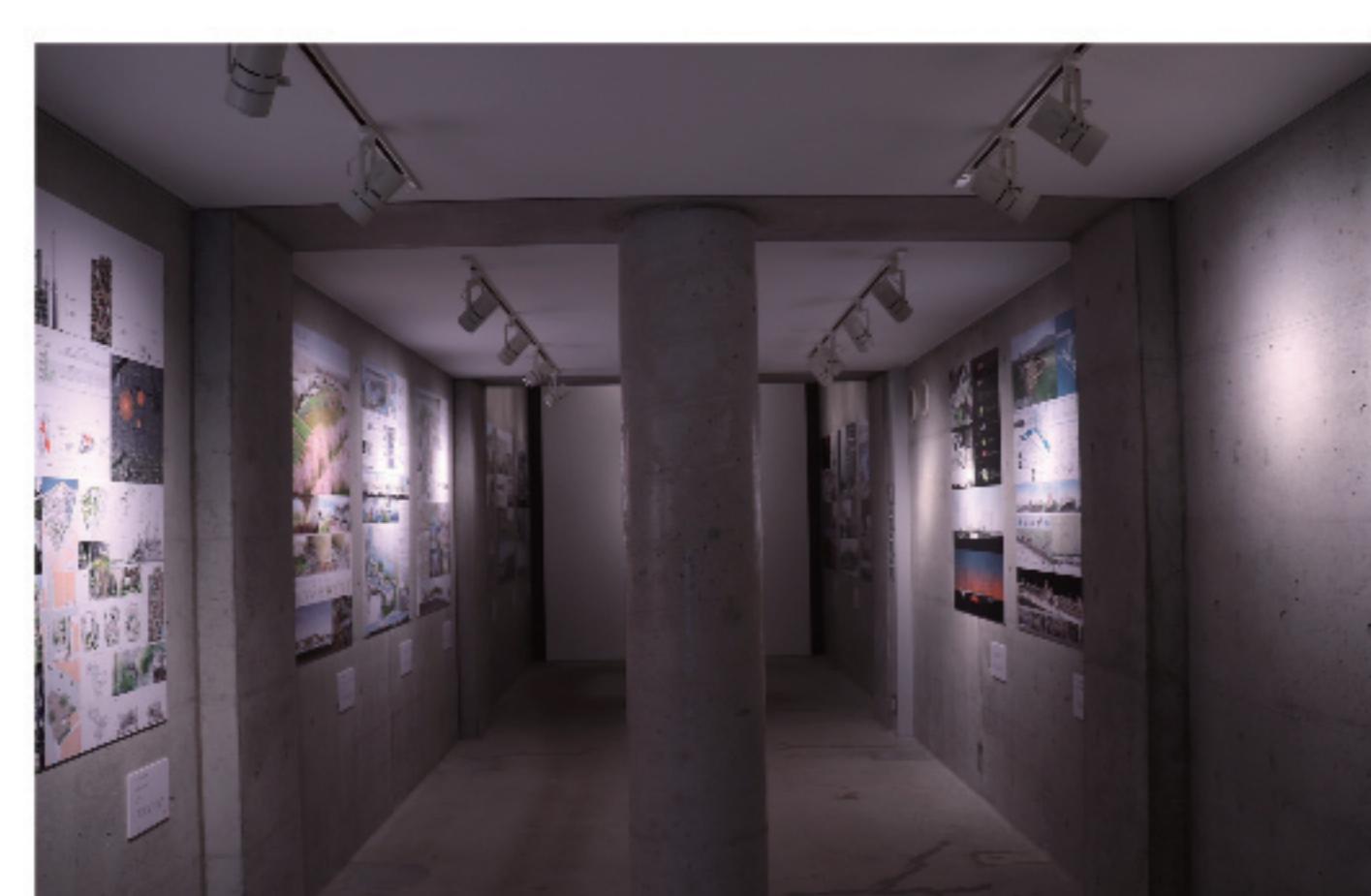
公開審査会：2020 年 11 月 29 日（日）13 時 10 分～16 時 30 分

展示内容：設計演習特論 課題作品 (A68) 卒業設計 (A68)

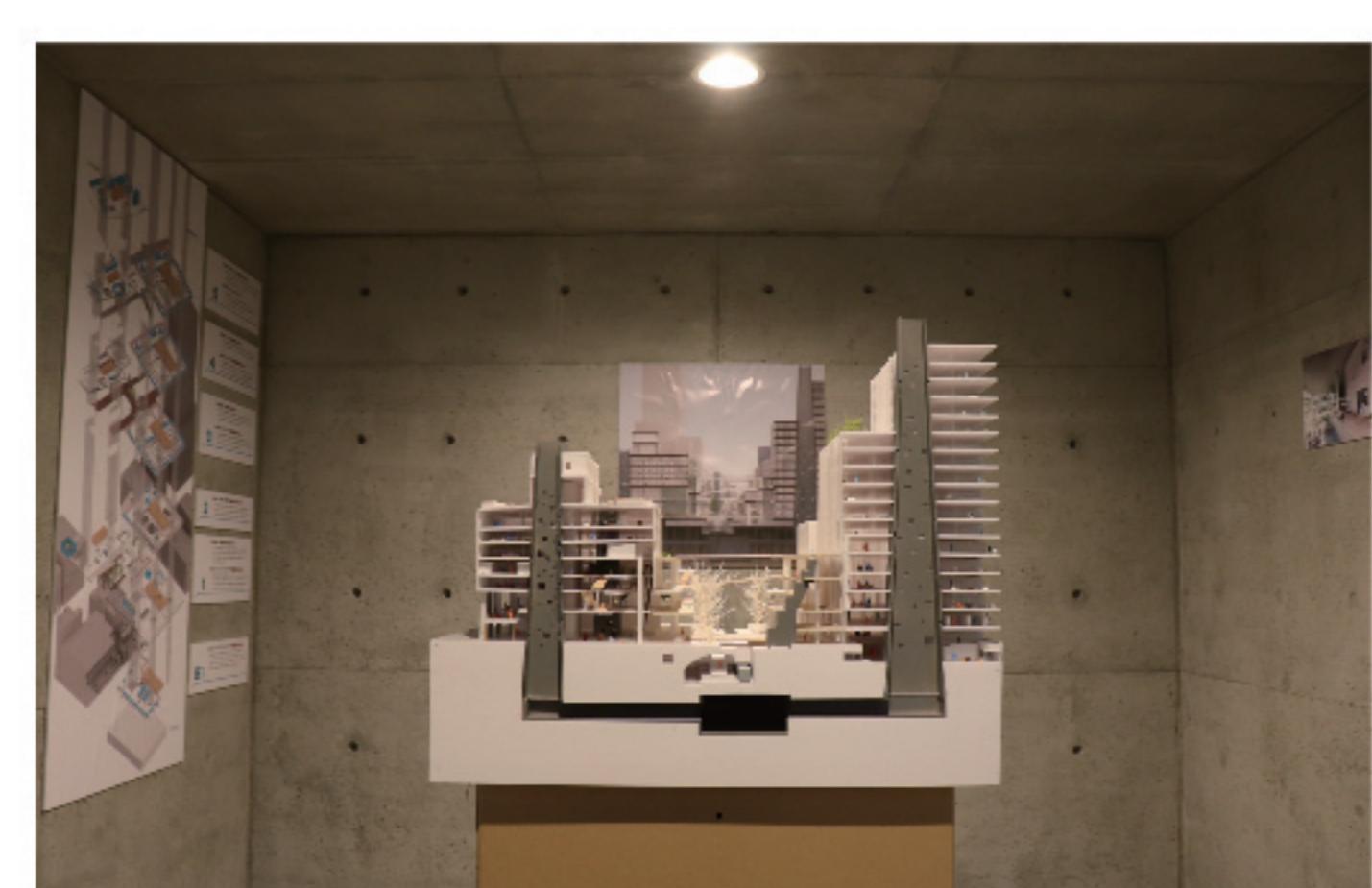
主催：NN 展実行委員会

共催：神戸大学 遠藤研究室 / 末包研究室 / 楢橋研究室

後援：木南会 | 神戸大学建築系同窓会



▲作品展示

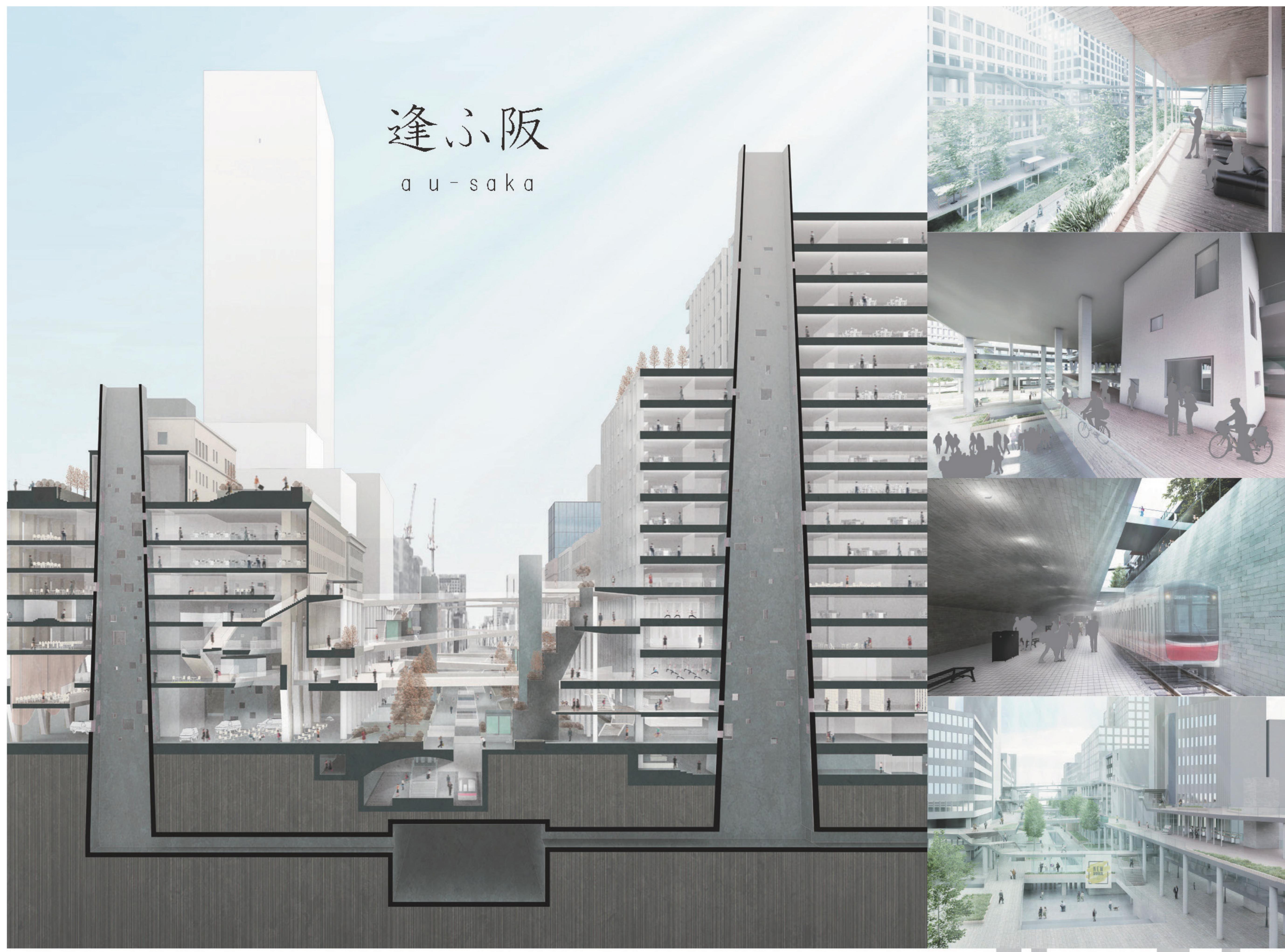


▲公開審査会



## 逢ふ阪 au-saka

上山貴之（遠藤研）黒木孝司 吉川文乃（楓橋研）小池晃弘（末包研）田中駿介（栗山研）

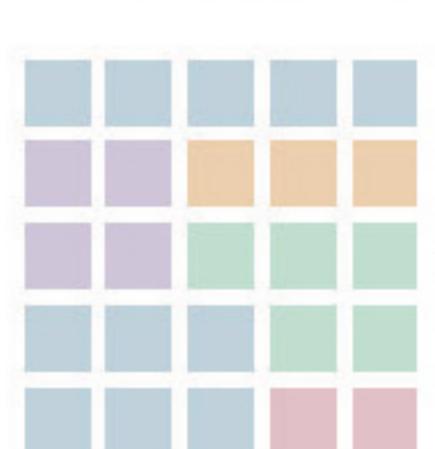


## 1. コンセプト

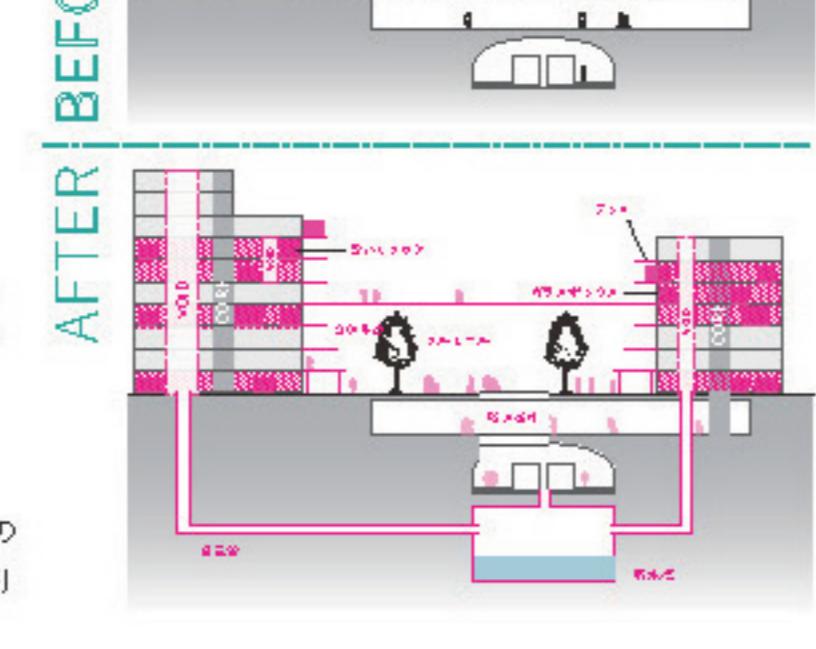
## 「会う場所」としての都市

今後の都市空間は人やその場所にあるモノ、環境と「会う」ことが主目的の場所となる。感染症や予期せぬ災害への対策を行ながるも、これまでの都市生活やオンラインでは得られない多様な出会いのある空間がwith/afterコロナにおける都市のあり方であると予想する。

通行や滞留、イベントなど様々な機能を柔軟に受け入れるストリートのような空間をつくる。都市で増加する空きスペースを利用してその空間を点でさせることで、今までにない出会いを生む。また非常時に必要な機能へと転用可能にすることで、様々な事態に対応できる都市となる。

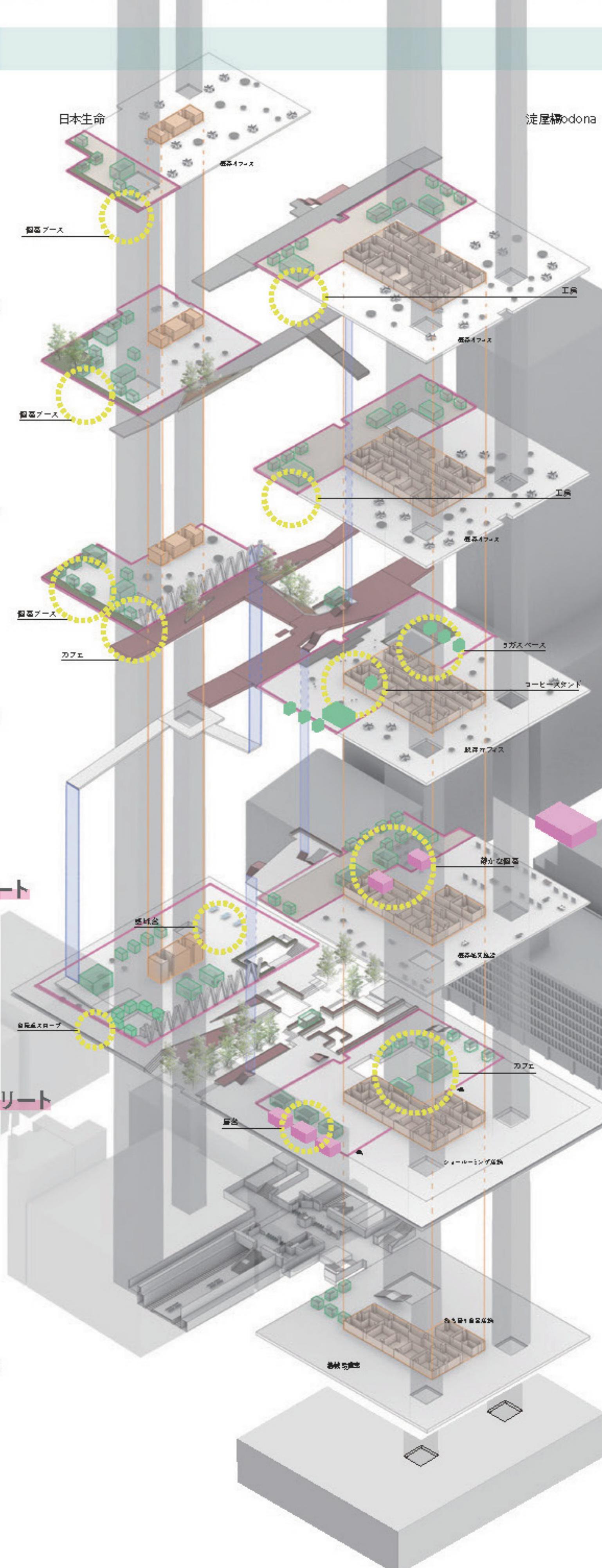


機能が分散化して穴として場所が残る。  
道のような広場のような空間性。



後の方が時間変化し、予備としての  
空間となり、小さな単位になってより  
多様な場所に分散できる。

## 4. プログラム

5 日本生命：オフィス+溜まりのストリート  
odona：オフィス+ストリート4 日本生命：くつろぎのストリート  
odona：オフィス+創造のストリート3 日本生命：交流のストリート  
odona：オフィス+交流のストリート

## 2 odona：書店、家具店+溜まりのストリート

1 日本生命：広場のようなストリート  
odona：ショールーミング+屋台のストリートB1 odona：テイクアウトショップ  
+待合のストリート

貯水槽

## 2. 提案

## ①ストリートとしての貸しスペース

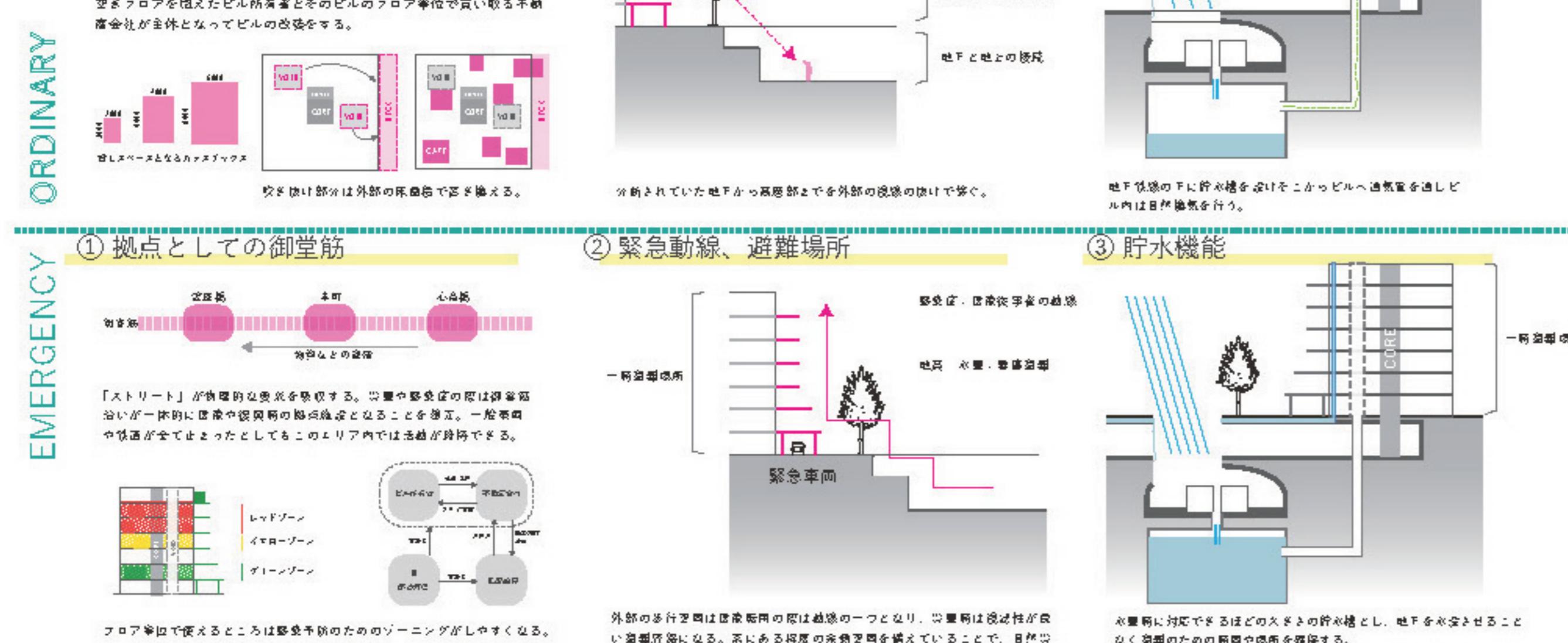
## ②立体歩道

## ③雨水利用と自然換気

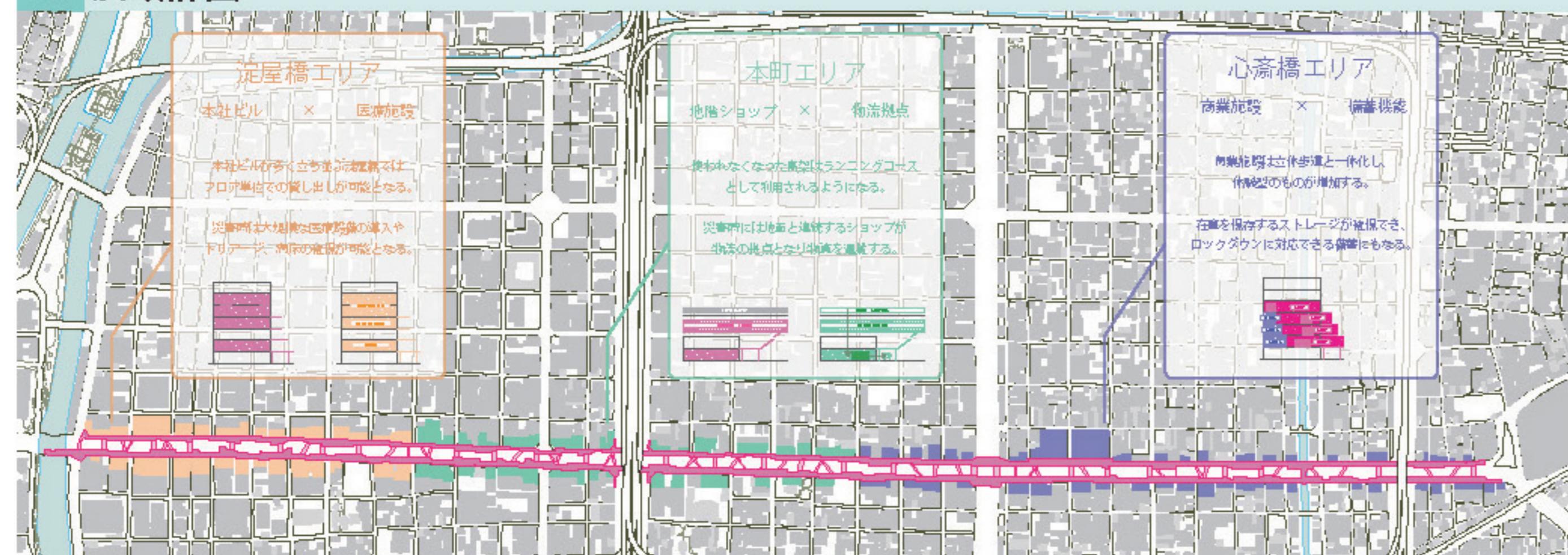
## ④拠点としての御堂筋

## ⑤緊急動線、避難場所

## ⑥貯水機能



## 3. 広域計画

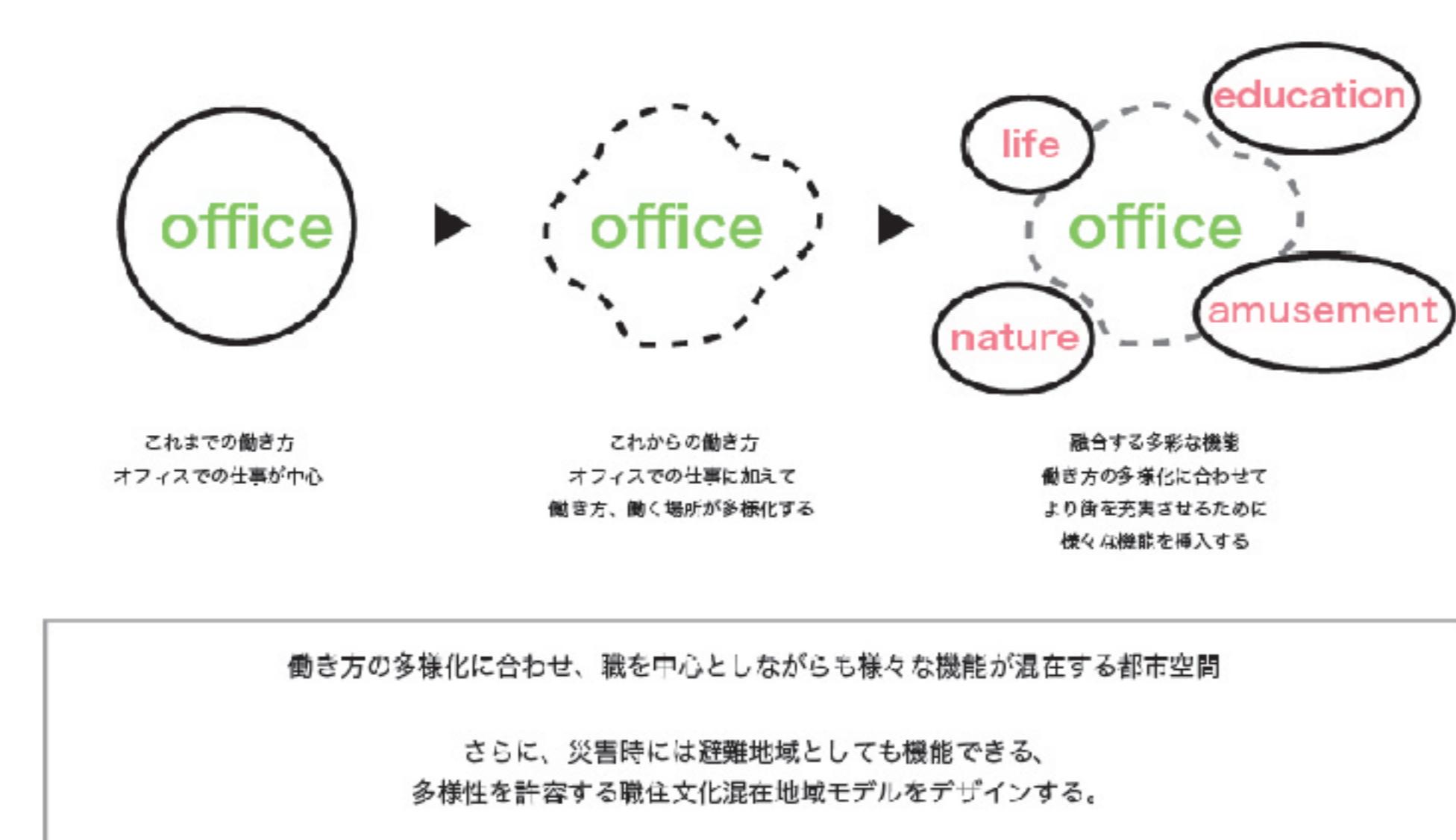


## Next Living Park in Osaka

藤原比呂（未包研） 谷口浩都（楓橋研） 楠橋請ノ助 大石祥子（栗山研） 胡徳贊（遠藤研）



concept



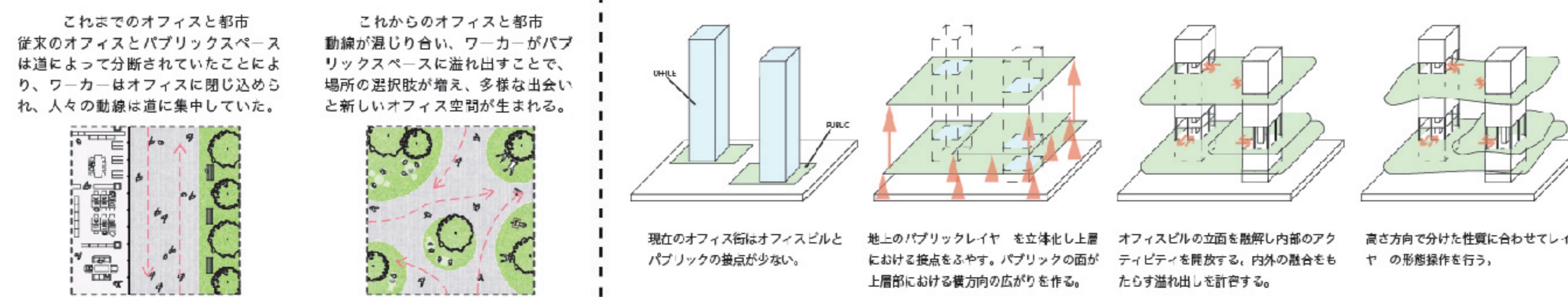
site 大阪ビジネスパーク (OBP)



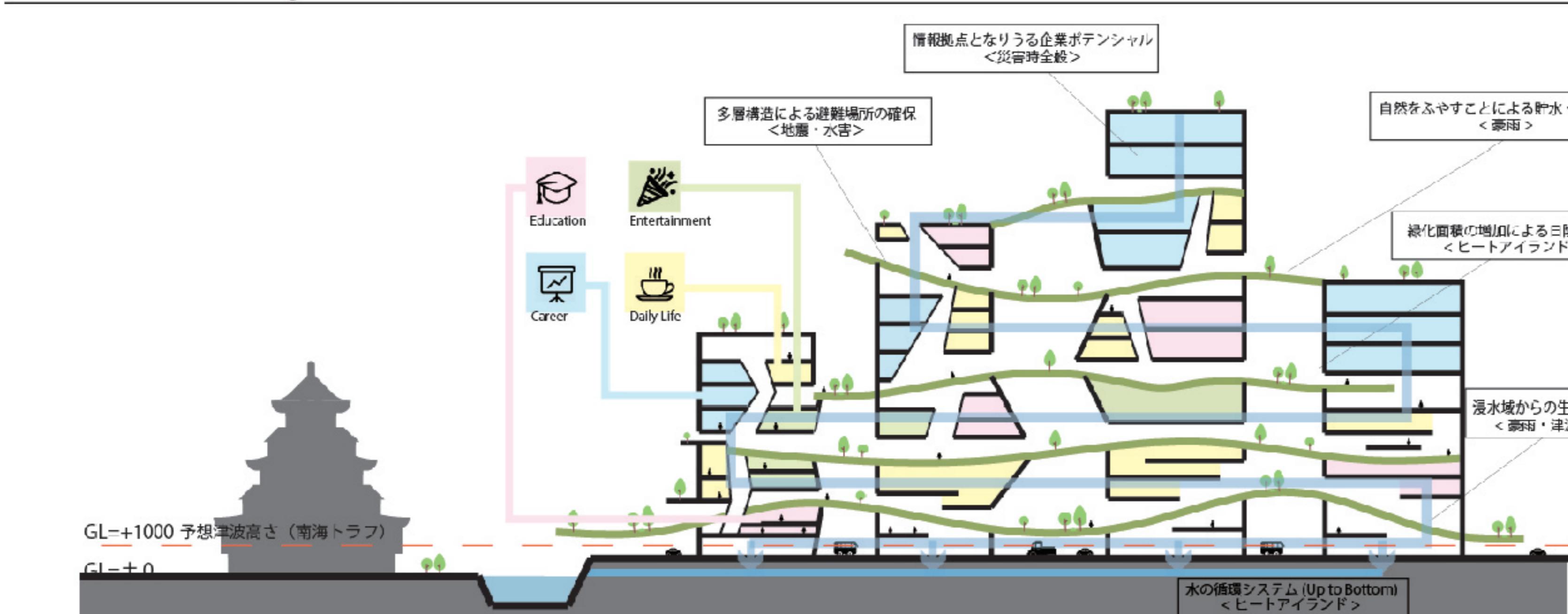
proposal



program



resilient system



## Urban Switch - A City of NEW NORMAL-

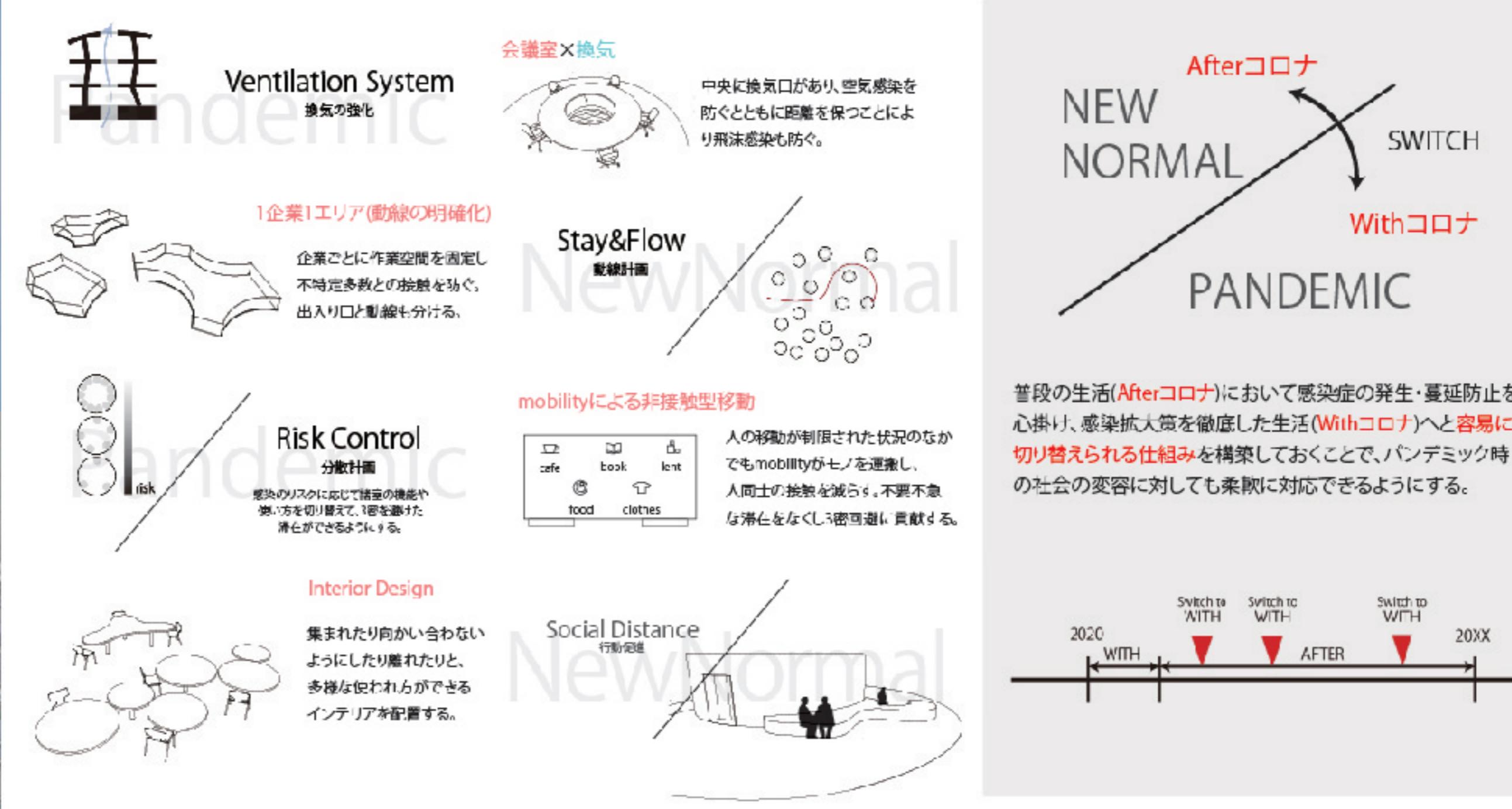
向上沙希（櫻橋研）中上和哉、TINNU Panchanok（遠藤研）北村祐輝（栗山研）佐田桜（末包研）



オフィス・商業エリアで使用する物資や災害時に配給する食料を貯蔵する倉庫

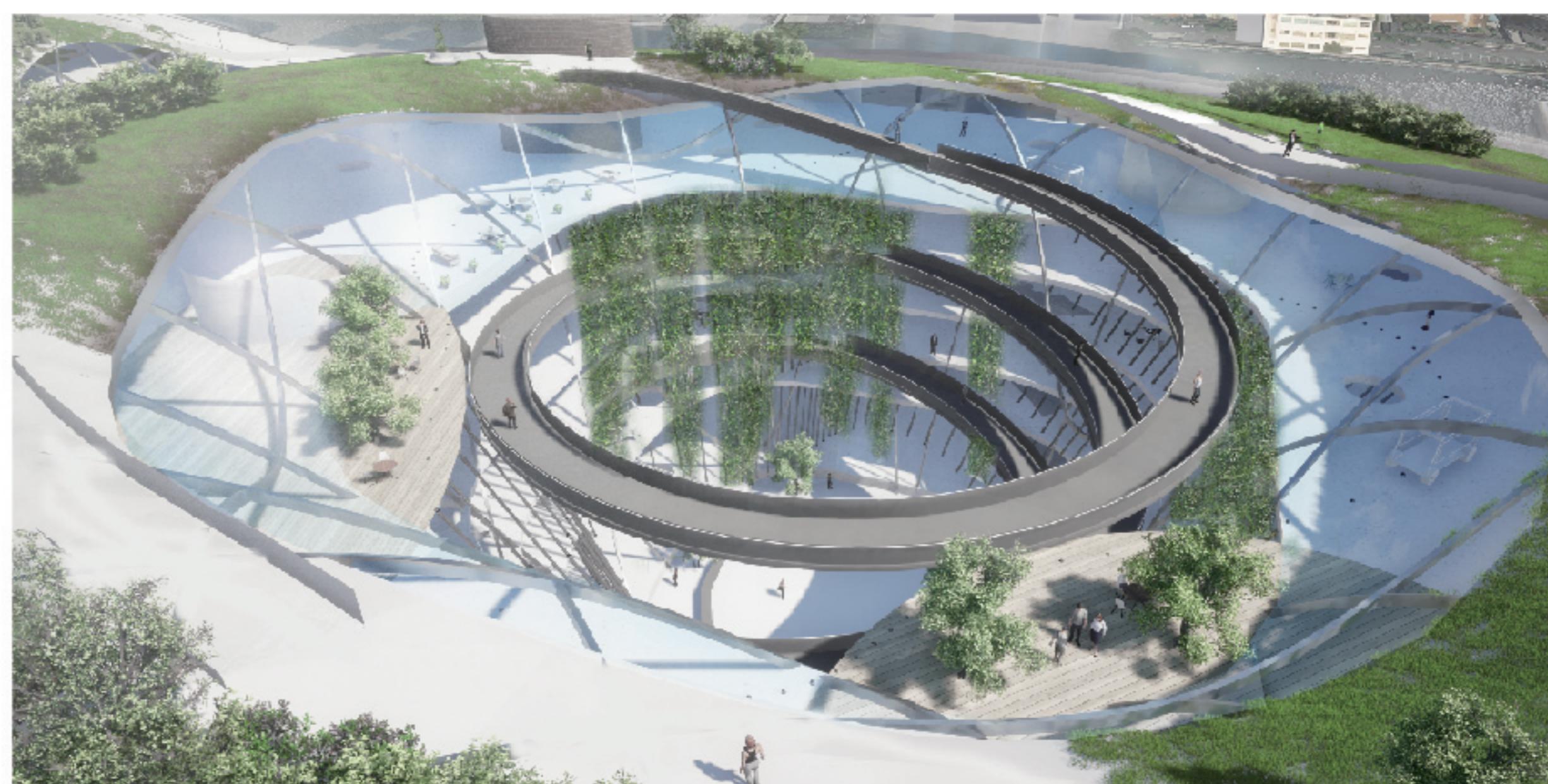
敷地中央部に掛かる土佐堀橋から北方向を見た景観  
有機的なランドスケープが都市の空間を織るPark & Ride と東側エリアの接続部  
ここから徒歩やモビリティでオフィス商業施設へ向かう動線が show window となり、活動が溢れ出す  
with ではガラスの空間内部から商品が見える

## Solution

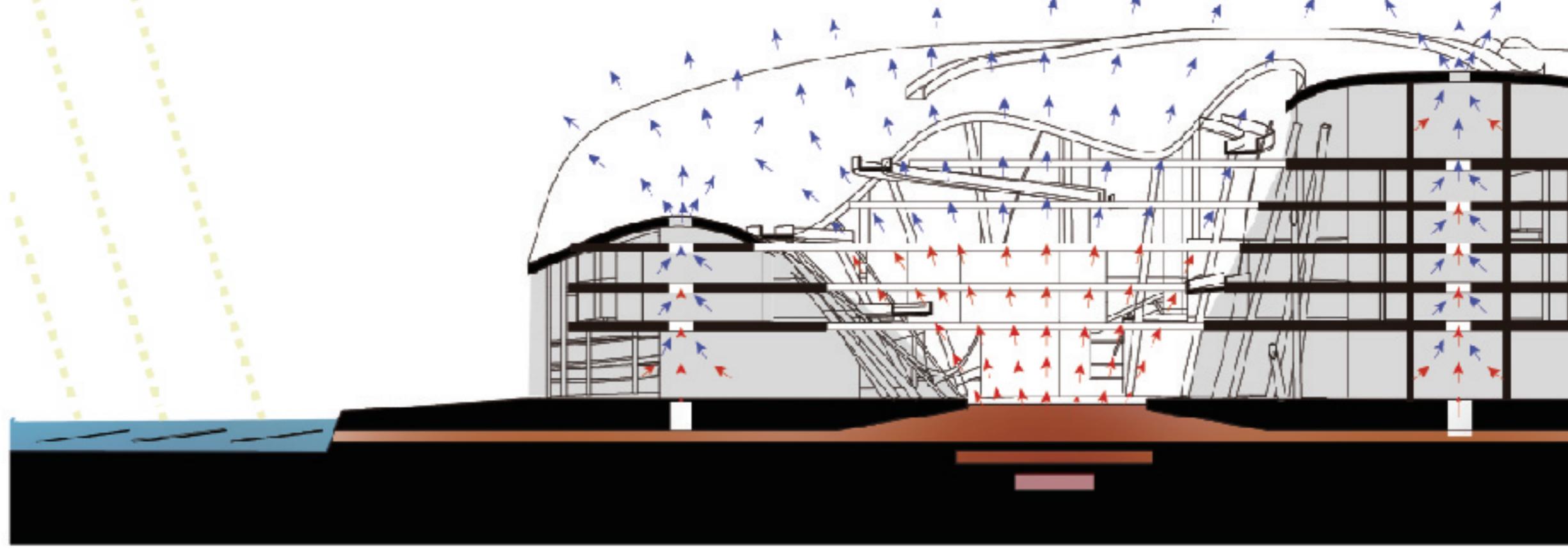


Afterの暮らしにWithが共存する

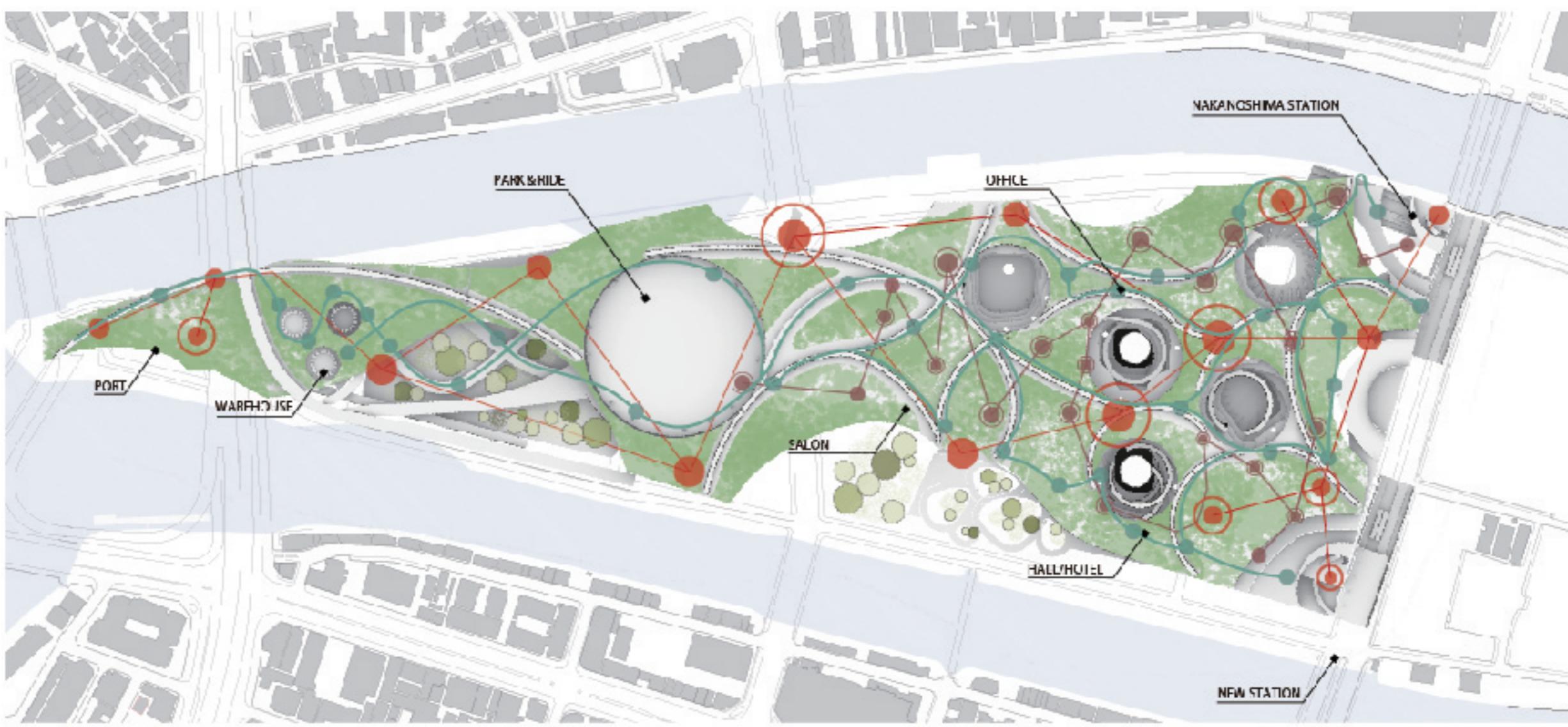
## Ventilation System



大きな穴が生み出す熱を利用した自然換気



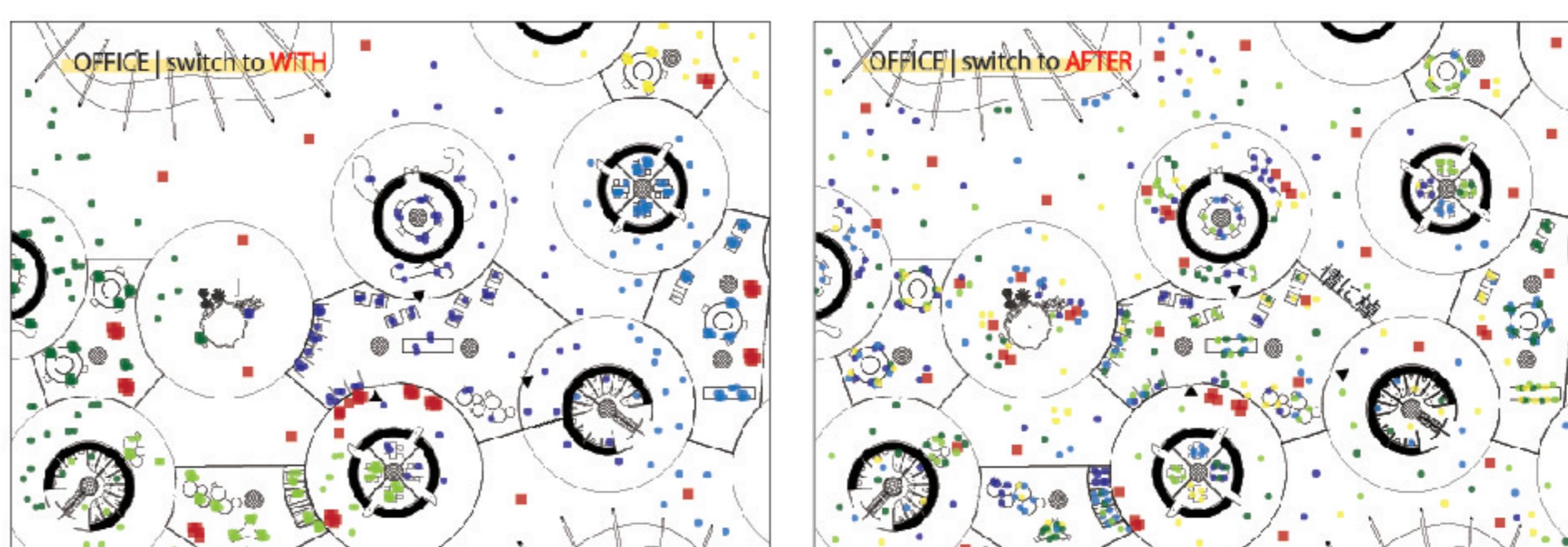
## Stay&amp;Flow



## Risk Control

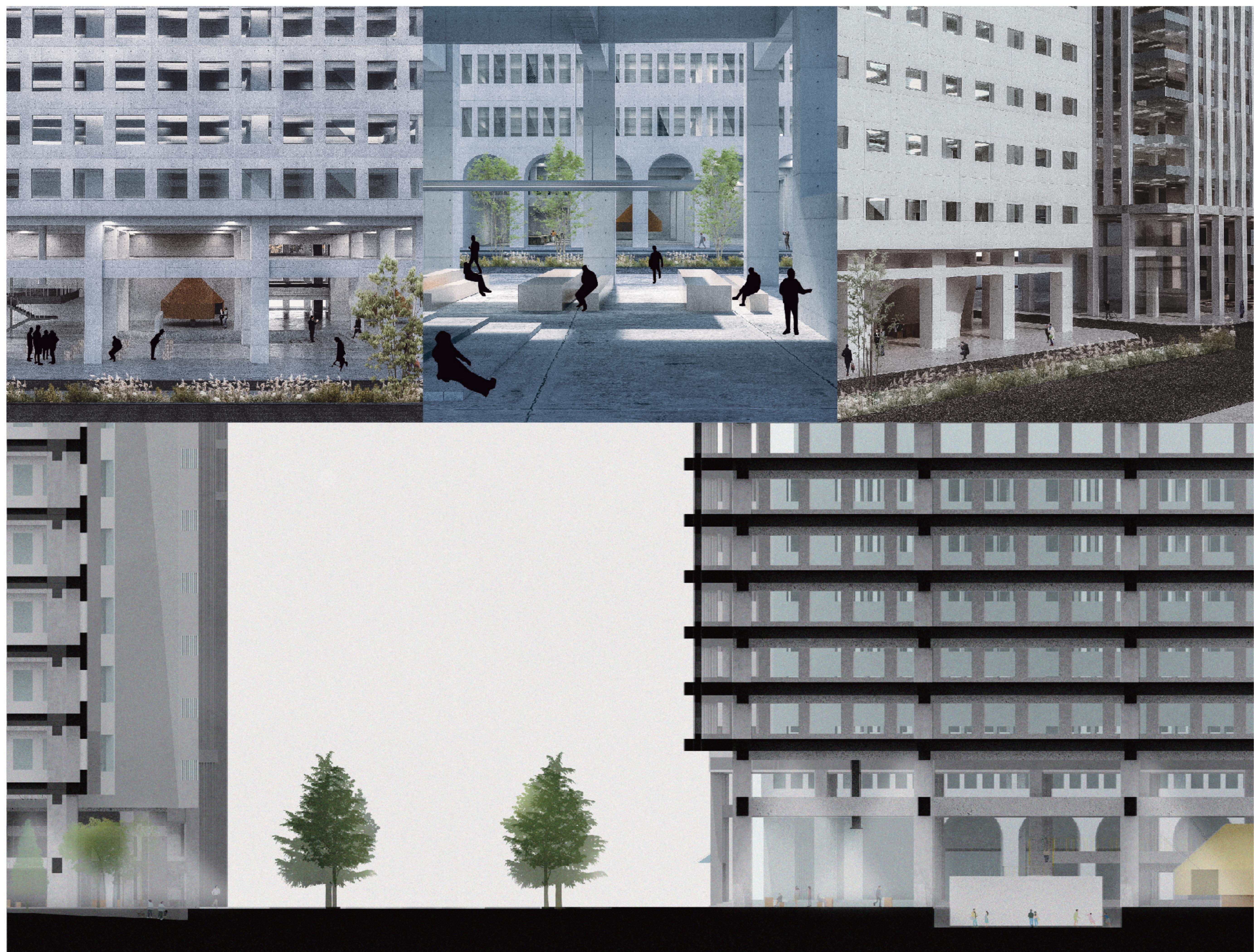
WITH と AFTER での人の空間利用の変化を可視化するためのドットマップ

## OFFICE



## UTSUWA OFFICE

檀野航 高橋和志（楳橋研）鈴木滉一 藤井郷（栗山研）曹陽（遠藤研）



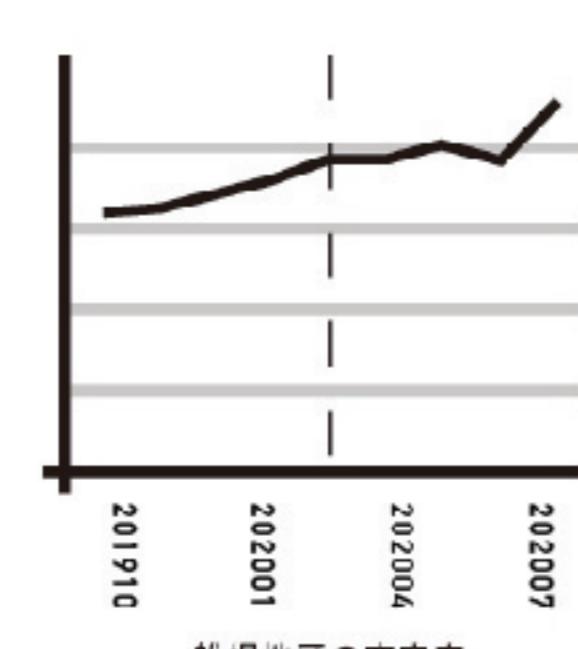
001 背景

ウィズコロナの時代において、リモートワークや授業のオンライン化など、以前から潜在的に波及しようとしていたものが一気に広がり、仕事や勉強は多くの場合場所を固定化する必要などなかったことが明らかになった。今まで都市にまで赴いて行われてきた様々な活動が、今まであのビルの、あの階の、あの机でしかできないと思っていたあらゆることが、どこでだってできる時代の兆しを、皮肉にも今回のパンデミックが示してくれた。



004 空室率の増加とリモートワーク

ウィズコロナの時代において、リモートワークの促進により、オフィスビルの空室率は増加していく。個人の仕事や会議などが職場でなくとも行えるようになったならば、オフィスに必要な空間は「高度なコミュニケーションの場」となり、例えば0から1を作るといったアイデアを創出するための場となっていくのではないか。

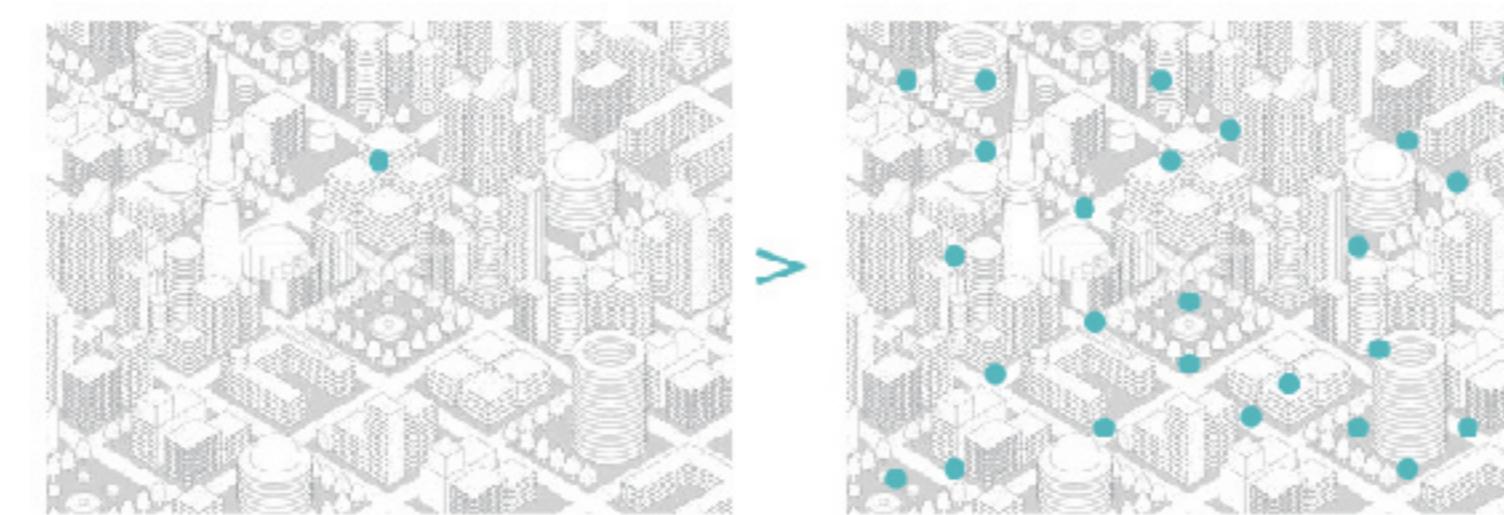


005 否定された空間の受け皿

人が密集するオフィス空間や、はたまた映画館、ライブハウス、大学の教室など、パンデミックによってその空間自体が否定され、店をたたまざるを得なくなったり、コミュニケーションの場としての機能を果たさなくなつたものが出てきた。今後生まれるであろうオフィスの余剩空間が、そんな否定された空間の受け皿として機能できないだろうか。

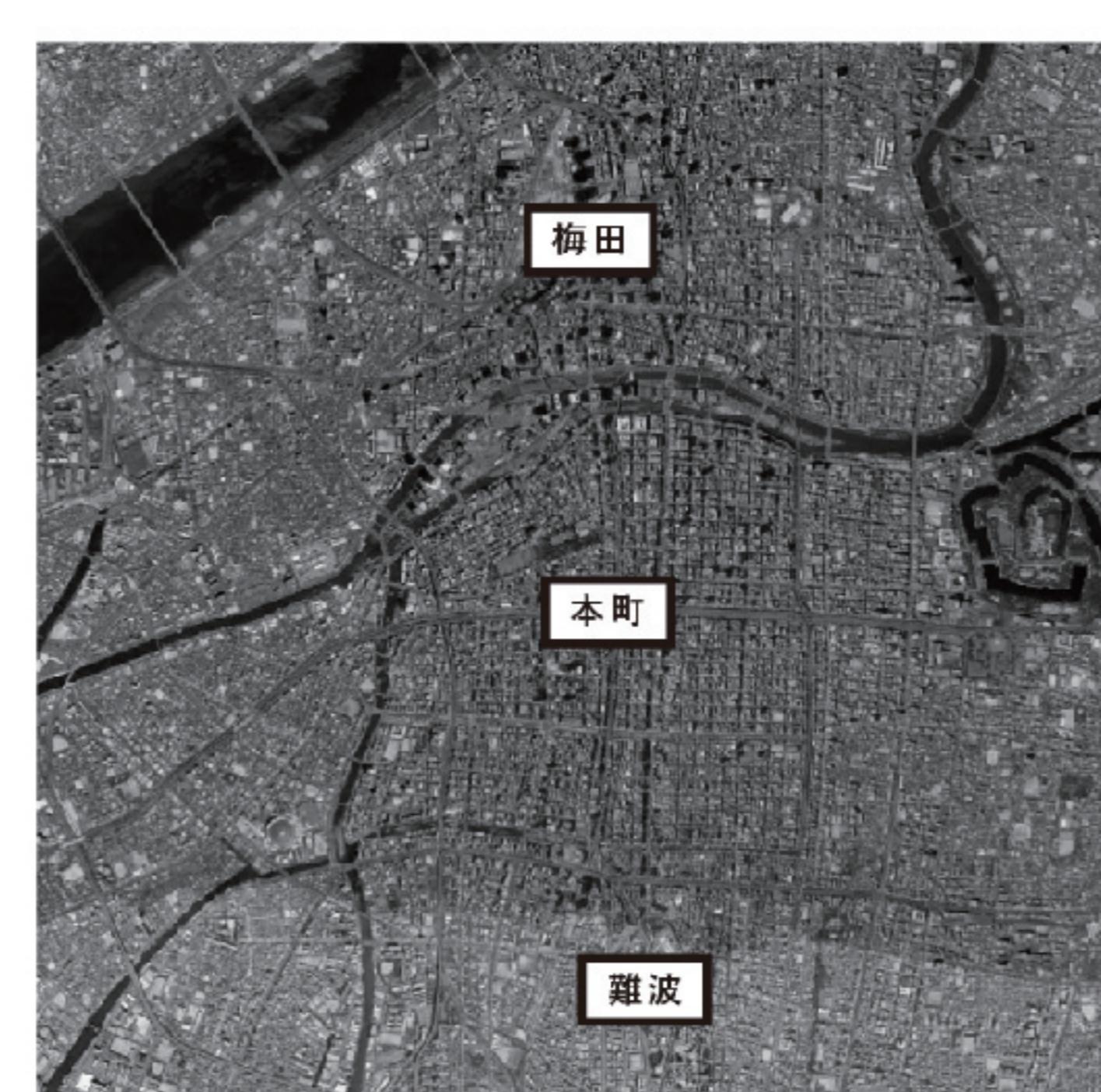
002 「都市のあらゆる場所が居場所となる」

これからの時代において、都市はそういった社会変化に、そしていつしかやってくるであろうパンデミック、見えない脅威にどう対応していくべきだろうか。  
これからの都市における場所の考え方方は、今までみたいに各個人に特定の場所があるという捉え方ではなく、都市の中のあらゆる空間が自分にとっての居場所として機能するというものに変わっていくのではないのだろうか。  
この「切り替え可能な居場所」という概念を携えた都市は、きっと来たる未知のパンデミックなどにおいて、それでも都市に住まなければならない、都市に出ていかなければならない人間にとつて、様々なリスクを回避する選択肢を創出するだろう。



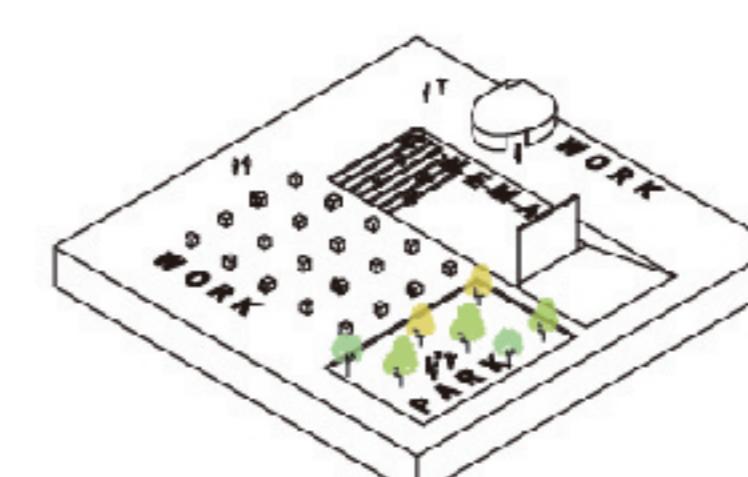
006 本町

敷地は、大阪の梅田と難波の中間地点にある本町である。大阪を代表するオフィス街であり、エリア全体を縦断するかたちで御堂筋が通っている。

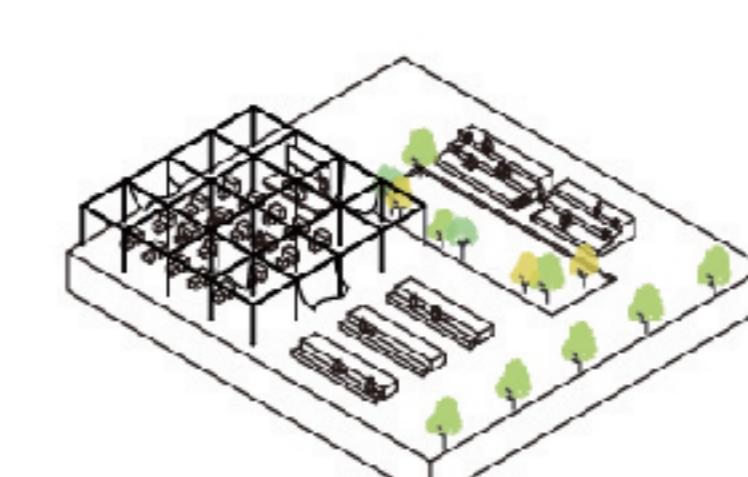


これからのオフィスビルが持っていく場所性

前述にある通り、コロナウイルスの影響でリモートワークといった新しい働き方が注目されている。オフィス勤務のデメリットとして感染リスクが挙げられるが、本提案により机、椅子の配置、壁を取り扱うといった操作で物理的、心理的に改善させる。またメリットとして新たなものを創造する上で重要な、偶発的な「出会い」を挙げることができ、本提案により新たな出会いの場が生まれることを踏まえると、オフィスへ出社する価値が上回ると考える。



今まで同じ顔ぶれや同じ空間を活動の場として用いていた。しかしこの空間では様々な人が不規則に存在しながら、『職場』に常時新しい刺激や活動が流れ込んでくる形になる。



梅田、難波という大阪の2大拠点をつなぐ御堂筋。本町はその中間点に存在するオフィス街であり、オフィスワーカー以外がこの街を訪れることはほとんどない。さらに各ビルは個々が孤立している上に、御堂筋に対してどこか閉鎖的である。本提案においてオフィス空間を新たな形態にすること、パンデミック下で大きな打撃を受ける産業（映画、大学機能など）を挿入することが新たな人の動線を生み出す。

